心身状態 把握し治療選択

自分一人で食事や入浴、着替え、排尿・排便はできるか、意思疎通やリハビリをしようとする意欲はあるか――。

愛知県安城市の石川峰男さん(90)は2019年12月、名古屋市の名古屋大病院で大腸がんと診断された後、心身の状態や認知機能を把握するため、約30分にわたり問診形式の検査をいくつも受けた。高齢者のがん治療に特有のリスクを避けるのに役立つからだ。

家族写真のアルバムを懐かしそうに見る石川さん(右)と次女の柳川さん(8月24日、愛知県安城市の特別養護老人ホームで)

特に75歳以上では、患者の認知機能や生活に必要な能力がどれくらいあるかを治療前に検査で確認する重要性が、老年医学の専門家から指摘されるようになっている。高齢者は腎臓や肝臓、肺の機能が低下していることも多く、使える薬や量に影響する。認知機能が低下している場合、服薬を続けるには周囲の手助けが必要になるかもしれない。

問診形式の検査の結果は、石川さんに年齢相応の衰えはみられるが、身体的には手術をしても差し支えないという内容だった。一方、日常生活に大きな支障はないものの、認知症が中等度まで進んでいた。

名大病院の老年内科の医師で、石川さんの次女の柳川まどかさんは、同僚の医師が行った検査の結果を見て、認知症が治療に及ぼす影響が気になった。高齢で認知症のある人は、長期の入院や手術などをきっかけに、幻覚や妄想が表れたり言動が攻撃的になったりする「せん妄」を発症しやすいからだ。せん妄は治療全般に支障を来す。

実際に、石川さんは以前入院した別の病院で一時的にせん妄を起こしていた。

柳川さんは、手術を担当する消化器外科の医師に「なるべく負担の軽い手術にできないか」と相談した。幸いに石川さんは開腹手術でなく、痛みが少なく入院期間も短い内視鏡手術を受けられた。術後1週間で退院でき、せん妄も出なかった。

その後、手術中に見つかったリンパ節への転移が悩みの種となった。働き盛りの患者であれば、がんの進行を遅らせて延命を図るため抗がん剤治療が有力な選択肢となる。しかし、石川さんの当時の年齢である85歳の場合、延命につながる保証はない。免疫力の低下や肝機能異常、食欲不振、全身の倦怠感(けんたいかん)などの副作用が出る可能性も高い。

高齢のがん患者を数多く診てきた柳川さんは、父の将来を考えた。「認知症は確実に進んでいく。今は治療の意味が分かっても、1～2年後には抗がん剤の目的や副作用を理解できなくなり、『これは何だ』と不快な思いだけを抱きながら毎日を生きるようになったらしんどいだろうな」。父の意思を確かめる必要があった。

(この項続く)

(このシリーズは全7回)

副作用リスク 点数で評価

乳がんは中年期に多く発症するものの、患者数では70歳以上が3割超を占める。治療は手術、放射線治療、薬物療法の三つが中心で、特に高齢者に抗がん剤を使う際は、副作用が生活に与える影響を慎重に考える必要がある。その判断に有効な評価法が登場し、導入する医療機関が増えている。

名古屋市の上野敦子さん(67)は2004年、右胸に良性の腫瘍が見つかり、以来、地元の診療所で年1回検査を行い、経過観察を続けていた。今年4月の検査で悪性の腫瘍が判明。さらに詳しく調べると、ホルモン療法や最新の分子標的薬が効きにくいタイプであることが分かった。

手術が必要なため、5月、同市の国立病院機構名古屋医療センターを紹介され、7月に右乳房の全摘手術を受けた。リンパ節への転移はなかった。ただ、しこりは3・5センチと術前に想定していたよりも大きく、採取した組織を調べた結果、活動性が高く、術後に再発するリスクが心配された。

主治医で同センターブレストセンター長の沢木正孝さんは、抗がん剤で治療するべきだと判断した。むくみや発疹などの副作用を伴う可能性はある。副作用のリスクを確認するため、「CARG(カーグ)-BC(ビーシー)」と呼ばれる方法で評価した。肝機能や貧血に関わるヘモグロビンの数値、転倒歴、治療を支える人の有無などを点数化し、リスクの大きさを3段階で示すものだ。

上野さんは沢木さんから、副作用のリスクは最も低い水準という判定結果を知らされた。将来を考えて治療をした方が良いと勧められた。それでも、副作用への不安はぬぐえなかった。高校時代に始め、今もクラブチームで活動するハンドボールのことが気になった。「治療で体が弱り、参加できなくなったら生きがいを失う」と語る。

今月3日、改めて夫と一緒に沢木さんから治療の説明を受けた。上野さんは「抗がん剤治療をしたら安心できるのか」「しないとどうなるのか」などと矢継ぎ早に質問をぶつけた。不安で少し混乱していると感じた夫から「副作用のリスクは低いし、先生が適切に対応してくれる」と諭された。冷静な一言が治療への後押しとなった。

沢木さんは「副作用のリスク判定は、医師が患者の価値観を共有し、対話しながら治療法を決めていくのに欠かせない」と話す。

上野さんは11日に最初の抗がん剤治療を受けた。この後も3週間ごとに計4回の治療が続く。今は、12月に行われるハンドボールのシニア全国大会への参加を楽しみにする。「選手として出るのは体力的に難しいかもしれないが、仲間の応援はできる」と前向きな気持ちを取り戻している。

抗がん剤治療の前に沢木さん（右）の診察を受ける上野さん（11日、名古屋市で）